

# ハンガリーの事例を 岩尾總一郎 一般財団法人ハンガリー医科大学事務局 理事に聞く



慶應義塾大学 医学部客員教授  
元厚生労働省医政局長  
元WHO健康開発  
総合センター長

「海外で医師への道を志すのは、国際化の時代に、日本の選択肢の一つとして大きな意味を持つ。元厚生労働省医政局長を務めた岩尾總一郎慶應義塾大学医学部客員教授は、国際社会に通用する医師の育成の重要性をこう語る。海外での医療教育履修の意義などについて、同氏に聞いた。」



豚足を使って縫合を練習する医学生ら

「ハンガリーで医師国家試験に合格すると、どんな働きができるか。EU域内各国は共通認証制度をとっており、ハンガリーで医師国家試験に合格すれば、EU域内では医師として働くことができる。EJ域内で医師として働くことができる。英語で学んでいるので、アメリカやカナダでの医師資格認定も取りやすい。日本に帰国後、医師国家試験に合格すれば、もちろん日本で医師になれる。海外で医療教育を履修し、日本の医師国家試験を受験する場合にはその国の医療教育レベルが問題になるが、ハンガリーは問題がないと考えられる。なお、人口約1千万人の同国からはノーベル医学・生理学賞受賞者が3人輩出されている。日本は2人で、人口比からしてハンガリーの優秀さが分かる。」

「日本から留学した学生は、どんなカリキュラムで学ぶのか。ハンガリー医科大学の入学試験を受ける前に予備コースが設けられており、英語をはじめ、生物、化学など基礎を学ぶことができる。医科大学の入学試験は生物と化学が物理のレベルの高い問題が出て、筆記と口頭で試験が行われる。日本の高卒程度の問題をはるかに超えているので、予備コースでしっかりと学ぶ。私が見学したときは、生物学ではR<sub>h</sub>抗原と逆転写酵素、化学ではアミノ基と有機化合物の合成反応過程などを学んでいた。日本では大学1、2年レベルだ。医科大学では、ハンガリー語のほか、英語とドイツ語で学ぶ。日本からの留学生は英語コースで学ぶ。日本と同じ6年制で、各学年は前後期に分かれ、約30単位ずつ取得し卒業する。留学生は志が高く、深夜遅くまで学び、がんばっている。なによりも医師になりたいという情熱が大切だ。日本と違い教養科目がなく、1年次から解剖学や生理学の専門講義を情報機器が整った中で受ける。解剖などの実習も6年次には口頭試験のほか、20単位の卒業論文を書く。在学中から様々な実験に携わることができる。」

「国際化が進む中で、国際的に活躍できる医師は必須の存在だ。世界に目を向ければ、世界中で医師は不足している。ハンガリー医科大学で学ぶ、EU、アメリカ、日本の医師資格を得るのは、国内だけでなく、日本と日本が国際社会にどのように貢献できるかという視点からも、ますます重要になるだろう。」

「帰国後には、日本での医師国家試験が待っている。ハンガリー医科大学の日本人学生は、在学中に国立弘前大学医学部や慶應義塾大学医学部で研修を受けられる。岡山大学医学部も研修を受け入れる予定だ。日本の医師国家試験に向けては、帰国後に、受験対策の集中講義が予定されている。あらためて海外で医師を目指す意義を。」

## ハンガリー留学生が体験語る

Q どのように勉強をしていますか。  
A 去年からクリニカルが始まり、最近には机に向かって勉強するよりも患者さんを診て検査をする勉強が多くなりました。机に向かってだけではなく、直接、患者さんを診て勉強しています。  
Q 生活面や勉強で苦労したことは。  
A 言葉のカベが一番大きかったです。ここに来るまではまったく喋れなかったのですが、最初は言葉が通じなくて苦労することが多かったのですが、シャイにならず外に出て、友だちとい

時間をもっと、少しずつですが克服できたと思います。  
Q ハンガリーに来て良かったことは。  
A 22歳まで日本を出たことが一度もなかったのですが、日本を出ないと分からないことはたくさんあると思います。初めてヨーロッパに来て、新しいもの、新しい人々を見て、聞いて、学んで、本当に自分は変わったと思いました。  
Q 将来の医師としての抱負は。  
A 世界で働けるようになったら良いと思います。今夏はイスラエルに外

科研修に行ってきた、いろいろな国の人や医師や学生と、いろいろなことを話し、いろいろなことを学ぶことができました。今月末には、アメリカの試験を受けるために、準備をしています。(このインタビュー後に、アメリカでの医師免許取得のための試験 USMLE のSTEP1を受験し、合格。STEP2受験に備えている)  
Q ハンガリーで医学を勉強することを考えている人にメッセージを。  
A 日本にいと分らないことがたくさんあると

り学会で発表する学生もいる。日本で医師になるには高卒後に留学すると最短7年、予備コースに行けば8年かかる。日本では1浪2浪が当たり前で、学部受検を考えると、そう大差ないし、授業料と生活費を含めると日本の国立大学に行くのとほとんど変わりはない。  
——留学ではなにかと困る場面が起ころう。支援の手立ては。  
奨学金では、大学の近くや構内にスタディールームがあり、日本人の先輩やHMU専属チューターが手厚く学生を支援する。またチューターが、交通機関の使い方や銀行口座の開き方など生活全般にわたってサポートしてくれるので、安心して勉強に励める。  
——帰国後には、日本での医師国家試験が待っている。

### ページ大学5年生



神野 和志さん  
Q 勉強時間は。  
A 大学では1日平均6時間ほど。それを除いて5時間くらいです。  
Q 苦労したことは。  
A 最初の1年は英語が大変でした。ただそれも最

初めの2〜3カ月で、あとは本を英語で読んだりコミュニケーションも全て英語なので、すぐに慣れました。生活面では今まで独り暮らしをした経験がなかったのですが、料理をしたり勉強以外のことで結構苦労しました。  
Q 医学の勉強での苦労は。  
A 僕はあまり血管などが得意ではなく、ハンガリーでは検体が多いので本よりも生の検体で勉強します。それで最初はちょっと気持ち悪くなってしまいました。  
Q ハンガリーに来て良

### センメルweis大学3年生



加藤 佑介さん  
Q 勉強時間は。  
A 大学では1日平均6時間ほど。それを除いて5時間くらいです。  
Q 苦労したことは。  
A 最初の1年は英語が大変でした。ただそれも最

# 日本で、そして世界で活躍するために

## 「共通語」英語で医学を学ぼう 最新情報の獲得にも大いに役立つ



東京大学医学教育  
国際協力研究センター  
北村 聖  
主任教授に聞く

国内はもとより海外の医学教育の向上をめざして、2000年に発足した東京大学医学教育国際協力研究センターの北村聖主任教授は、医学、医療分野における国際協力の第一人者として活動している。北村教授は、「一般に医学分野における国際協力という同センターからスタッフが赴き、学生を教える指導者に対して研修を行っているのだが、こうした場面で用いる言語は英語だ。今、国際的な場での「共通語」は英語となっている。また、同センターでは海外での新しい情報を得るために海外から医学教育者を客員教授として招聘し、講演や共同研究などを行っているが、こうした場面で用いられるのも英語だ。一方、最先端の論文が発表されるのも英語が多く、今や医学における英語の役割は大きなものとなっている。『日本の医学は、立派ではあるけれど独自のもの』とある北村教授は、「たとえは、立つので、広い知見が必要と

して研修を行っているのだが、こうした場面で用いる言語は英語だ。今、国際的な場での「共通語」は英語となっている。また、同センターでは海外での新しい情報を得るために海外から医学教育者を客員教授として招聘し、講演や共同研究などを行っているが、こうした場面で用いられるのも英語だ。一方、最先端の論文が発表されるのも英語が多く、今や医学における英語の役割は大きなものとなっている。『日本の医学は、立派ではあるけれど独自のもの』とある北村教授は、「たとえは、立つので、広い知見が必要と



医療分野での国際協力として現地に根付くためのスタッフ育成に力をそそぐ

が行われるが、日本では教授が診察するのを見て、診断が読める。日本人が外国の医学学校に留学し、英語で医学を学ぶことを選択できる時代である。つまり、病気を理解しようとするのか、患者を診ようとするのか、前提が異なる。『日本の医学は、立派ではあるけれど独自のもの』とある北村教授は、「たとえは、立つので、広い知見が必要と

なる。北村教授は「以前は針のようなたがった専門医が最先端とされていたが、これからは富士山のように高さもあるが裾野も広いことが大切になる」とする。こうした点からも北村教授は、「これから国際的な視野をもつ医師が求めら

学習環境・設備が整った教室で勉学に励む